

「古事記にはミステリー小説以上の面白さがある」と話す田島恒さん（中央）



古事記の謎解きに挑戦

毎日文化センター広島（本文）では昨秋から教養講座を拡充。その一つが田島恒先生の「古事記入門 太安萬侶（おのおのやすまろ）が込めた謎を解く」です。伝存する日本最古の歴史書は「古事記」と「日本書紀」ですが、それらはどのような意図をもって編さんされたのでしょうか。GZOスタッフの伊藤眞知子が授業をレポートします。

古事記の講座を開くけど、受講してみませんか。そんな館長の言葉から始まった。時間も大丈夫だし、伊勢神宮と出雲大社の遷宮ブームに乗ってみるのも一興かと軽い気持ちで受講を決めた。先生は田島恒（たしま・ひさし）先生（74）。経歴を聞いて最初のサプライズ。広島大学工学部を卒業の後、大手メーカーで発電機の開発に携わり、主にIT関係の畑で働いてきたという。

会社籍中に熊野本宮大社を訪れたことが契機となり、時期が来たら、古事記を研究しようと思っていたとか。退職後、その思いを断ちがたく、広島大学大学院に入り直して、めでたく古事記の研究に入った。

太安萬侶の暗喩とは？

理系先生と受講生が「バトル」

712年古事記成立。8世紀の大和朝廷は次期天皇をめぐる権力闘争の真っ只中。60有余年の自分の人生で、蓄積した知識を総動員して考える。所属する派閥によっては、命がかり。以前には、大化の改新が起きたんだよね。21世紀の今にもありそうなことだ。そうなんだ、1300年前の話ではなく、今であっても不思議ではない、そう示唆して

私の中ではIT関係者は、頭の中に「ゼロと1」の2進数しかないという思い込みがあるので、なんとも理解

しがたい経歴だった。初っ端から「因幡の白兔の話、おかしいと思いませんか」という問いかけに、「そうだよ」と言われているからそうなんだと、思ってしまった。どこがおかしいのか分かりますか。その「ワニが1万匹。それを1匹ずつ教えながら、ピョンピョン渡らなうて変ですよ。一体どれくらいの距離なんですか」「そこで引つかかるなんて。理系の人の頭はわかりませぬ」「では、その時が来たら説明します」1回目の講座は、マントーマンで開講。なんとぜいたくな！

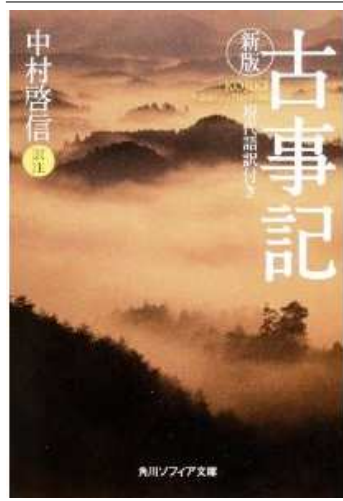
なので、この話が絶対に面白いと思ってくれる友達を引っ張り込んで、「Grandeひるしま」を寝る間も惜しんで編集している平木久恵さんだ。

2回目からは、口では負けない二人掛りでの講座を受けている。私の習った古事記は、田阿礼が聞き覚えてきた内容を、太安万侶が漢字を使って書き写した、というだけのもの。しかし、田島先生は、まさに太安万侶が「言いたくても言えない。でも言いたい」と思いをここに込めたと言います。まさにサスペンスだ。

丁寧な答えでくれて、時間が過ぎていく。2ヶ月はある分厚い教科書。3月6回の講座が終わって、ようやく44頁までたどり着いた。10月から始まって本来は12月で終わる予定だったらしい。「まあこのような感じで、続きを読んでください。それで締めるつもりでした」と聞いた。冗談ではありませぬ。まだ3ヶ月しか済んでません。エンドレスで続けてもらおうことになりました。生徒の質がよいと先生を動かすことができるのだ。

今、受験勉強真っ只中にいる人に伝えたい。興味のあることだけを、好きな先生に、好きなだけ教えてもらえる日がやがて訪れる。テストという評価をされずに！それが大人の特権だもの。その日のために、もうちょっとだけガンバレ！

【伊藤眞知子】



メモ 「古事記入門 太安萬侶が込めた謎を解く」第2・4火曜15時半〜17時▽受講料（4月から）3ヵ月1万2960円▽講師 田島恒（研究家）。テキスト代実費。「新版 古事記 現代語訳付き」中村啓信注（角川ソフィア文庫 本体価格1244円）。